

ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの環境世界論再考

秋澤雅男

はじめに

人間理性の進歩を体現し自由の自己実現の場であるはずのキリスト教文化圏全てを巻き込んだ、戦士の栄光ある個的死の幻影を完全に破壊し戦闘員非戦闘員の区別無き機械的な大量殺戮を、つまり各自的な有意味な死を無化する予兆無き非在化を万人に顕現させた第一次世界大戦の後、ヨーロッパの人々は、特に徹底的な制度の崩壊を経験した敗戦国ドイツとオーストリアの人々は、表面的には戦禍の癒えつつあった1920年代の享乐的な大衆文化に浸りつつも、前世紀の半ばよりダーウィン (Darwin, Ch.) の進化論とニーチェ (Nietzsche, F.) の超人哲学に代表される形で予示された、造物主であり絶対的理性たるキリスト教の神とその下で秩序付けられた文化の衰退の有り様を全身で感じ取った。この大衆的な感覚の渦の中で知識人達は、絶対的起源で且つ究極目的である存在の消滅へと向かう確率の高いゆらぎのなかで、中空に投げ出された西洋的 (個人の信仰の有無に関わらず) 人間の全体的危機を解明し、より明瞭に理解するため根底的な問い掛けを始めると共に、この危機に直接対峙しさらに乗り越えることを目指す思想を基礎付けるための方法論を求めて懸命の思索を行った。この狭義にはキリスト教文化圏における絶対者の衰退と無化による人間存在の無底化に対する危機意識は、同時に、ほかならぬキリスト教思想がアニミズムを弾圧排除することで世俗界に誕生させた機械的自然観・近代自然科学と人間の世界の直線的進歩観が、その産みの親を抹殺する事態への危機意識を、そしてこのような西洋近代の思想行動が西洋キリスト教世界だけでなく地上の全人類を絶滅に追い込むのではないかという広義の危機意識をも包含していた。無論、後者の広義な危機意識は、所謂〈アウシュビッツ〉と〈ヒロシマ〉を体験した第二次世界大戦後に広範な領域の人々に抱かれ、西洋近代の有り方に対する各自の姿勢を問わざるを得ない状況を招き、さらに今現在、環境問題、南北問題そして民族紛争を巻き込んで、その問い掛けは深刻さをいや増しているのである。その先鋭的な現れの一つが、加藤尚武の言葉を借りれば¹⁾〈権利アニミズム〉、〈世代間倫理〉、〈地球全体主義〉の三つの基本概念から問い掛けを進める環境倫理学であろう。

それはさておき、1920年代のヨーロッパでは、ドイツ文化圏を中心として、西洋近代の有り方に対する懐疑とその問い直しを通奏低音とする各種の学芸が芽吹き成長を始めた。思想界に限れば、まさに「現代思想の坩堝²⁾」を呈していた。この坩堝の中で融合と分離、反発と共感を繰り返し、そこより流れ出た思想は、なるほどそのある部分は、「近代の超克」を目指す有機体説・全

体論（Holismus）が政治的全体主義（Totalitarismus）に取り込まれることで残酷な結末をもたらすきっかけともなったが（この事は、日本の思想界でもあった）、死を免れぬ戦士が衣服に薫きこめた香の如き美しくも儂い微妙な差異を喜ぶ消費的文化の中で人間の根底的有り方と生存形態の根本的変更を問う、今現在の意味での現代の思索に底知れぬ影響力を持ち続けている。現代世界のいづれの思想も、西洋近代の有り方を乗り越え人類存続の道を示す真の思想的合金をその坩堝から鑄造出来ずにいる状況に於いて。

1920代に生まれた思索の成果をドイツ文化圏に限ってその極く一部を挙げれば、例えば、ウィトゲンシュタイン（Wittgenstein, L.）『論理哲学論考』（*Tractatus Logico-Philosophicus*, 1922.）、カッシーラー（Cassirer, E.）『象徴形式の哲学、第一巻：言語』（*Philosophie der symbolischen Formen*, 1. Bd. *Die Sprache*, 1923.）、ハイデッカー（Heidegger, M.）『存在と時間』（*Sein und Zeit*, 1927.）、シェラー（Scheler, M.）『宇宙における人間の地位』（*Die Stellung des Menschen im Kosmos*, 1928.）等であろう。

ところで、これらの思索家達、否広くヨーロッパ全域の思想家に何らかの意味で影響を与えた、哲学を専門とすることなき在野の最広義での生物学者がいた。それが、ヤコブ・フォン・ユクスキュル（Jakob von Uexküll. 1864~1944）である。その思想は、前近代的な自然哲学と近代そのものの実験的精神と機能主義の、生活実態として貴族であることよりも精神的に貴族であることに誇りを抱いていた古き良きヨーロッパの全体の人間による折衷的融合に過ぎないと言うこともできよう。しかし、それ自らの営為の中で西洋近代の思想的枠組みの限界と危うさを感じ、その枠組みを乗り越えようとした、なるほど後ろ向きであったかもしれぬが、その思索活動は、現代に生きる我々に多くの示唆を与えるものである。即ち、近代化を社会存続の目標として掲げる多くの地域の人々の意識の波を被りつつ、近代の枠組みの選択的否定と肯定の緊迫した力場の内で、精神的にも世俗的にも絶対的一者への還元と流出を拒絶する多元的世界の反映的機能連関による調和のコスモスを築き上げるようとする者たちに、その乗り越えようとする静かなる形の営みに、ユクスキュルの思想は、貴重な力を与えてくれるであろう。

なお、この論文は、京都薬科大学「人文系研究会」平成6年度第2回例会（5月24日）の発表内容を敷衍したものである。

予備的概観

「……というのは、主観は現象界の構築の際に決定的な役割を演じているからであり、また現象界の彼方に世界など存在しないからである。そもそも現実性とは、すべて主観的な現象なのである（Alle Wirklichkeit ist subjektive Erscheinung）、このことは、また生物学にとっても、非常に基本的な認識であるにちがいない。³⁾」—このユクスキュルの言葉は、彼の主著『理論生物学』（*Teoretische Biologie*, 1920）の「緒論」からのものだが、そこには、彼の生物学思想の中核を成す環境世界論（Umweltlehre）を形作る基本的立場が述べられている。この引用のすぐ後で、彼はかように語る—「対象とは、その構成を主観に負う現象なのである、という認識によって、我々は、カントによって、すべての自然科学の構造を支えるために比類なき仕方で用意され、昔に確認された地盤に入り込むのである。（略）生物学の課題は、カントの研究の成果を二つの方向に拡張するというにある。即ち、一つには、我々の身体、特に我々の感覚器官と我々の中枢神経系

とを共に考慮することであり、二つには、（動物という）他の主観の対象への関係を探究することである⁴⁾」。

以上から判るように、ユクスキュルの思想形成には、カント（Kant, I.）の影響が、それも『純粹理性批判』の「感性論」に重点を置く初期新カント派を介しての影響があると言えよう。事実ユクスキュルは、新カント派の最も初期の人物で、通俗的な唯物論者達の客観主義を認識論的に批判した物理学者であり生理学者であるヘルムホルツ（Helmholz, Hermann von）より、彼自身生理学者として直接的な影響を受けたのである。但し、彼は、ヘルムホルツに関して「……しかし、彼は現象の背後に現実性を探し求めたのである。このことは、すでに彼の前の多くの人々によって成されたことである。しかし、彼は、次の点で彼の先行者とは区別されるのである。つまり、彼は、現象の背後に世界精神を想定するのではなくて、物理的な世界法則を想定したのである。それは、趣味の問題である。」⁵⁾と、批判を込めて述べている。

いずれにせよ、ユクスキュルは、カッシーラー（Cassirer, E.）の言うように「哲学者として、観念論者でありまた現象論者である⁶⁾」と共に、別の視点から見れば、後に示されるが、限定された意味で、不可知論的实在論者であると言うこともできよう。しかし、ユクスキュルは、学としての哲学を専門とする講壇哲学者ではない、彼は、文字通り知を愛する者として、心理学、生理学、生物学と専門的に分化した枠を水平的にも垂直的にも乗り越える思索を、経験的事実に基づいて行い、それらの学を総合し基盤付ける、換言すれば、心と身体を包み込む全体的な有り方を問う根源的な生物学を形成しようとしたのである。従って、先に挙げた「そもそも現実性とは、すべて主観的現象なのである」と言う彼の発言は、「……形而上学的あるいは認識論的考察にもとづくものではない。それは、むしろ経験的原理に基礎をもっている⁷⁾」ことに注意を払わねばならない。つまり、「主観的現象」とは、意識により構成されたもの・理念化されたものではなくて、生物主体が知覚と作用（行動）により具体的に形成する生きられる世界、即ち環境世界に対応するのである。この意味で「主体的現象」と訳す方が相応しいかも知れぬ。このことは、ユクスキュルの次のような発言からも明らかである—「個々の認識が得られる前に、その認識のための形式が、確かに心のなかに予め先に形作られている。しかし、このような形式は、経験の経過のなかで変化するのである。この生物学的に非常に重要な認識の形式をカントはなおざりにし、そしてあらゆる経験に先立って存在しなければならぬかの形式に限ることを求めたのである……⁸⁾」。この見解を、論理的先験性（論理的アプリアリ）と発生的先験性（生得性と言い換えても良からう）との区別を解さぬ—生物学者の発言と取ることも可能であろうが、あくまで経験的原理に立つユクスキュルの立場表明として積極的に捉えることも出来よう⁹⁾。

ともかく、ユクスキュルの思想的基盤は、経験的原理に基づく観念論であり現象論である、と言えよう。但し、現象論・現象主義（Phänomenalismus）という術語は、限定された意味で現象学（Phänomenologie）と置き換えることも可能である。つまり、「親しい環境世界に於ける人間の自然的な世界生（*Natürliches Weltleben des Menschen in seiner vertrauten Umwelt*）」¹⁰⁾、換言すれば「生活世界（*Lebenswelt*）」を主題化したフッサール（Husserl, E.）後期のひとつの現象学的立場に、或いはメルロ＝ポンティ（Merleau-Ponty, M.）の根底的な現象学的立場に通底するものがあるからだ¹¹⁾。なお、これに関連することだが、ユクスキュルの思想的立場を別の観点から見ると、全体論（Holismus）が、具体的に言えばゲシュタルト理論（Gestalt-theorie）が、重要な位置を占めている。

もつとも、彼は、後に言及することだが、ゲシュタルト理論を中立的に捉えるのではなく、ドリーシュ（Driesch, H.）やラインケ（Reinke, J.）の超機械的自律的ファクターであるエンテレキー（Entelechie）に基づく自然科学的装いをした生氣論（Vitalismus）と結び付けて、生命体にのみ限定して把握した。まさに、やはりカッシーラーの言うがごとく「ユクスキュルは生氣論の果敢な闘士であり、生命の自律性の原理の支持者」¹²⁾なのである。

さて、以下の節に於いて、ユクスキュルの環境世界論、つまり簡略に言えば、生物主体が種としてもまた個としても、生得的に備わる知覚能力に応じて、外界の様々な客体から主体にとって意味のある部分を能動的に切り取ることで形成する有意義な機能連関係の内、いわば「主体と環境世界のモノダスの全体性（die monadische Ganzheit von Subjekt und Umwelt）」¹³⁾の内に繫縛されてそのあらゆる生存活動を営むことを呈示する理論を、その理論の二つの主要概念を中心に考察する。その概念とは、「機能環（Funktionskreis）」と「計画性（Planmäßigkeit）」である。

I. 機能環について

ユクスキュルは、各動物主体の全生活がそこで演じられ、その主体を誕生から死まで包み込んでいる環境世界を、環境世界トンネル（Umwelttunnel）とも表現するが、「この環境世界トンネルの中で、すべての客体は、環境世界事物（Umweltdingen）」¹⁴⁾となるのであり、つまり「犬のトンネルには、犬の諸事物のみがあり、同様にブヨのトンネルには、ただブヨの諸事物のみがある、等々」¹⁵⁾なのである。そして「それらの事物がどの様に見えるかを、究明するのが、生物学の使命である」¹⁶⁾と、ユクスキュルは言う。

だが、ここで注意すべきことがある。つまり、「我々が確認し得ることとは、動物の環境世界は、その体制（Bauplan）（形而上学的意味を込めて、構成計画と訳すべき局面が後にでるが）が我々のものとかけ離れているのと同じように、我々のものとは非常にかけ離れている、ということである。従って、動物の様々な環境世界に於ける諸ファクターを、我々に良く知られている彼らの体制を手掛かりにして、探し出すほかはない」¹⁷⁾のである。つまり、擬人化を排するために、観察者である我々人間は「調べようとする動物に相対した場合に、その異なった世界を組み立てている知覚標識（Merkmal）が自分自身のものであって、観察者には決して知りえない異なった主体の知覚標識から生じたものではないことを、特にはっきりと認識しなければならない」¹⁸⁾と、ユクスキュルは注意を促す。即ち、ユクスキュルは、我々人間も他の生物と同様に、たとえ複雑であれ、やはり自らの環境世界トンネルに繫縛保守されているのだという事実問題としての限界を、生物学の営みに於いて肝に銘じておくようにと忠告するのである。

さて、人間とは異なる生物（動物と限定した方がよいであろうが）主体の知覚内容は、観察する人間にとって知りえないが、人間を含む各動物主体の環境世界の基本形式は、我々人間に（まさに人間だからこそだが）知りうるのだ、とユクスキュルは言う。つまり、「このような錯綜した世界組織を担い形成する唯一の変化せぬファクターが、機能環（Funktionskreis）」¹⁹⁾わけだ。それでは、この機能環の構造について少し詳しく考察することにしよう。この考察内容は、一見したところ機械論的なものにみえるであろう。

「各動物は、それ自らに独自なる構成様式（²⁰⁾Bauart）に基づき、外界の全般的な作用から特定の刺激を選び取る主体であり、その主体は、一定のやり方でその刺激に応答するのである。この応答は、外界への一定の作用を有し、そしてそれによって刺激に影響するのだ。このことにより、それ自身の内で閉ざされた循環運動（Kreislauf）が生ずる、これを動物の機能環と名付けることが出来る²¹⁾」。そして、「さまざまな動物のさまざまな機能環は、非常に多様な仕方で相互に関連しており、そして共同して、植物をも含む、生物の機能世界（Funktionswelt）を形作る。しかし、それぞれ個々の動物にとって、その機能環は、それ自身のために一つの世界を形成しており、その内で動物は全く閉ざされて生存している²²⁾」のである。

では、理想型としての機能環がもつ機能世界を分析してみると、それは、知覚世界（Merkwelt）、内的世界（Innenwelt）そして作用世界（Wirkwelt）の三領域から成り立つ。—

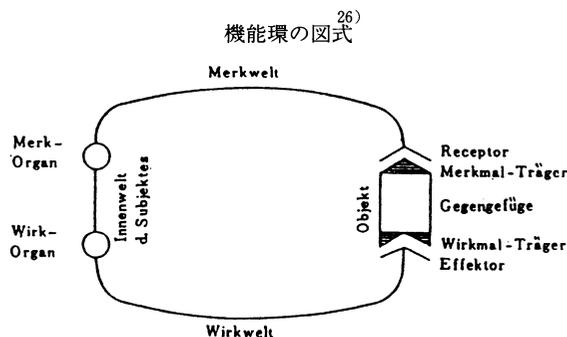
a) 知覚世界とは、外界からの刺激が形成する特定の様々な知覚標識（Merkmal）、それが動物主体の運動制御を行わせるのだが、そのような知覚標識の全体である。

b) 内的世界とは、動物主体が自らの運動制御を行うことで自分自身のために作りだした世界である。

c) 作用世界とは、動物主体が外界へ及ぼす様々な作用の全体のことである。²³⁾—

従って、「作用世界と知覚世界は、それ自身の内で連関する一つの全体を形成する。それを、私は、環境世界と呼ぶ²⁴⁾」と、ユクスキュルは語る。つまり、動物主体の形成する内的世界と環境世界とは、ぴったりと一致するわけである。

このような機能環の構造を比較的良好に知られた表現で言うと、「たとえていうならば、あらゆる動物主体は、ちょうどやっところ二本の腕で物をはさむように客体をつかんでいる。一つは知覚の腕であり、もう一つは作用の腕である。動物は一つの腕によって客体に知覚標識を、もう一つの腕によって作用標識（Wirkmal）を与えているのである。これによって、客体のもつある性質は知覚標識の担い手（Merkmal-Träger）となり、また他の性質は作用標識の担い手（Wirkmal-Träger）になる。一つの客体の所有するすべての性質は、客体の構造を通じてたがいに結びつけられているので、作用標識によって与えられた性質は、知覚標識の担い手である性質に対し、客体を通じて必然的に影響を及ぼし、また知覚標識そのものを変化させるように働きかける²⁵⁾」のである。以上のことを図式化すれば以下ようになる。



次に、機能環の構造分析ではなく、客体の側に重点を置いて、機能環（Funktionskreis）の環（Kreis）を区別してみると、基本的に四つの主要な環がある。即ち、(a)媒体の環（Kreis des

Mediums), (b)食餌の環 (Kreis der Nahrung), (c)敵の環 (Kreis des Feindes), (d)生殖の環 (Kreis des Geschlechts) である。²⁷⁾ (a)とは、動物主体には、それ自体何の刺激も及ぼすことはないが、それが消え去ることによって直ちに刺激解発的に作用し、制御を引き出して、その主体を再び媒体へと戻すように制御させる機能環のことで、媒体とは、例えば水や空気である。(b), (c), (d)は、共にそれら自体が動物主体に何らかの刺激を与えるのであり、ただ(b)と(d)では接近運動が生じ、(c)では逃避・防御運動が生ずる。そして、これらの環は、「知覚器官に於いて互いに遠く離れた後、内的世界の制御器官に於いて区分されて、作用世界に於いて再び互いに離れて独自の作用をなす²⁸⁾」のである。

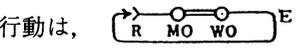
ところで、このような機能環の組み合わせは（即ち、内的世界であり、環境世界であるが）、単純なものから非常に複雑なものまで、つまり細菌や原生動物といった単細胞生物のものから、多細胞生物のものまで、またその多細胞生物に於いても一つ一つの細胞の単純な機能環の組み合わせからそれらの全体制に於ける非常に複雑なものまで多種多様にあるわけだが、基本的には同じシステムの全体性である機能環から成り立っているのだと、ユクスキュルは述べる。つまり、「動物主体は、もっとも簡単なものも、非常に複雑なものも、同じ完全さでその環境世界に適応している。単純な動物には単純な環境世界が、複雑な動物にはそれだけ豊かな環境世界が対応する²⁹⁾」わけであるが、環境世界の基本構造である機能環に視点を置く限り、その組み合わせの単純さ複雑さの差異があるだけで、そこに下等・高等という生命形態の価値論的な区別を導入することは、進歩・進化という擬人的・目的論的な先入観である、とユクスキュルは語る。彼は、次のように表現する—「古い種の中から、新たな生命のメロディーの形もち、新たな形態の動物が展開してきた。それらは様々な変化を示しながらその生を終えていったが、しかし決して未完成から完成への移りゆきを示すことはなかった。(略)至る所で前進・展開がおこなわれたが、決して適者生存という意味での進歩・進化ではなく、闇雲な激しい生存闘争による淘汰でもなかった。その代わりに生と死とが絡み合ったメロディーが支配した³⁰⁾」のだと。ここには、ユクスキュルの進歩主義・進化主義への嫌悪感が滲み出ている。先の引用のすぐ後に、彼は、ランケ (Ranke, L. von) の書 (*Epochen der neueren Geschichte*) からの引用文を挙げ、そして「ランケは人類の歴史に於ける進歩を否定した。というのは、すべての時代が直接に神に由来し、従って他の時代より完全な時代は存在しえないからである³¹⁾」と語る。この発言は、19世紀後半から20世紀初めに掛けて、スペンサー (Spencer, H.) やヘッケル (Haeckel, E. H.) を介し、それらの進化論思想が資本主義社会で通俗化され大衆化されることで生じた熱狂的な社会動向に対する、ユクスキュルの知的貴族としての反発を示すと共に、前近代的であるのみならず、もしかすると近代を超えるかも知れぬ、生命の変遷を秩序付ける論理的・理念的静態宇宙論たる彼の自然哲学を示唆するものである。このことは、次の節で触れることになる。

さて、話を機能環に戻す。機能環の存在様態は、先に述べたようにシステムの全体性を表すが、ユクスキュルのその構造分析には、アングロサクソンのな操作心理学や行動学に見られるロボットモデルや機械論的な刺激—反応図式 (the mechanistic stimulus-response scheme)³²⁾ に類似した、「分析=加算的・機械論的な見方³³⁾」が表面立って見える。例えば、ユクスキュルは、動物の行動を以下のように公式化している³⁴⁾。

- (a) 反射行動 (Reflexhandlung) = $\frac{R}{I} - \frac{MO}{I} - \frac{WO}{I} - \frac{E}{I}$
- (b) 形成行動 (Formhandlung) = $\frac{R}{I} - \frac{MO}{I} - \frac{WO}{I} - EI$
- (c) 本能行動 (Instinkthandlung) = $\frac{R}{I} - \frac{MO}{I} - WOI - \frac{E}{I}$
- (d) 可塑的行動 (Die plastische Handlung) = $\frac{R}{I} - MOI - \frac{WO}{I} - \frac{E}{I}$
- (e) 経験的行動 (Erfahrungshandlung) = $\frac{R}{I} - MOI - WOI - \frac{E}{I}$
- (f) 制御された行動 (Die kontrollierte Handlung) = $\frac{R}{I} - MOI \rightleftharpoons WOI - \frac{E}{I}$

(R=Rezeptor 〈受容器〉, MO=Merkorgan 〈知覚器官〉, WO=Wirkorgan 〈作用器官〉, E=Effektor 〈実行器〉, I=Impuls 〈インパルス〉)

少し説明を加えれば、(b)では、例えばアメーバーの仮足（擬足）形成のことが考えられており、(d)では、例えばパブロフ (Pavlov, I. P.) の実験に於ける犬の条件反射が考えられている。(e)では、例えば鳥のソウガが、その前で口笛を吹いてみることで、一つの新しいメロディーを自分で吹くようになるような場合が挙げられる。そして、(f)では、動物主体の実行器の活動が自分の受容器によって制御される経験的行動（内的世界に限れば、知覚器官と作用器官の相互作用）が考えられている。このような各行動の機能環の組み合わせの差異で、動物主体の体制の差異が、環境世界の複雑さの差異が生ずるわけである。

ユクスキュルは、(f)の制御された行動を、さらに具体的に図式化する。つまり、実行器の受容器への作用が身体外部で生ずる際の制御された行動は、 と表現され、また同じその作用が身体内部で生ずる際のその行動は、 と、表現される。³⁵⁾そして、「人間では、三種類の受容的な制御の全てが生ずる。それで、人間は、第一に眼と触覚器官によって、第二に筋感覚によって、第三に案内標識によって、自分の運動を制御する能力を持つ。³⁶⁾」とユクスキュルは語る。

このような行動の機能環の構造分析には、知覚器官と作用器官の間、つまり内的世界、換言すれば、中枢神経系の中枢部（大脳）の分析が欠落している。その理由は、一つには、脳と神経の実験的生理学が、なるほどユクスキュルも取り上げたパブロフの条件反射の実験が20世紀の初期に確立されていたが、神経生理学や大脳生理学として盛んになり、筋繊維の活動電位や脳波の検出や描記がなされるのは、1920年代、30年代に成ってからである、という時代的な限界である。いま一つは、ユクスキュルの形而上学的と言ってよい、その全体論的で生氣論的な思想的立場から、要素還元的な分析を嫌ったという個人的な限界である。ともかく、彼は、ある意味でまだ幸せな時代に生物学的思索が出来たと言えるのかも知れない。

それはさておき、先の制御された行動の機能環の図式を見てすぐに気づくことであろうが、それらは、刺激—反応図式にフィードバック (feedback) の機構を加えたシステムを表している。つまり、生物が自己の内部環境を一定に維持するための自己調節機能、即ち恒常性維持 (Homeostasis) に於いて典型的に示されるフィードバック・システムを表す。従って、トゥール・フォン・ユクスキュル (Thure von Uexküll) ³⁷⁾ が指摘するごとく、ユクスキュルの動物行動の

機能環の分析は、第二次大戦後ウィナー（Wiener, N.）により提唱された、動物と機械に於ける伝達（communication）と制御（control）の理論であるサイバネティクス（Cybernetics）理論の先取りであると言ってよからう。

しかし、ユクスキュルは、是までに何度も触れているが、新動物機械論には向かわず、生命の自律性を讃え、また人間中心的という意味での合目的な考え方を拒絶する形而上学的自然哲学に向かう、と言うよりは、その根底にコスモ的な・調和的な生命宇宙の自然哲学がある。このことを示唆するのが、先に挙げた(a)から(f)の行動の機能環の公式に於ける I 即ち、インパルスの、その公式での位置である。つまり、そのインパルスが、現在使用される意味で、神経系の情報伝達を行う all or non の信号であり活動電位である神経インパルス（nerve impulse）であれば、 $R \underline{I} MO \underline{I} WO \underline{I} E$ とでも表せばよいものを、なぜ上記のような公式で表現されるのだろうか。この疑問に答えることは、次節の主題である計画性（Planmäßigkeit）に繋がることになる。なぜなら、ユクスキュルは、インパルスという言葉で、神経系に於ける現代的意味でのインパルス（それを、彼は、適切に〈興奮の波（Erregungswelle）〉と名付けているが³⁸⁾）について語ってはいるのだが、それに止まらず、神経生理学的・生化学の意味を越えた、つまり機械論的・因果論的な思考の枠を越えた意味を表すのである。では、そのような意味のインパルスとは、いかなる有り方の出来事なのであろうか。

ユクスキュルは、先に挙げた行動の公式に関連して、「……それで超機械的なファクター（übermechanischer Faktor）の干渉が、操作機能にとって必然的である。この場合、従って、インパルス（das I）は、主公式の中に共に受入れられねばならない。インパルスが干渉するその位置に従って、行動の区別が行われ得るのだ³⁹⁾」と述べている。それでは、その超機械的なファクターであるインパルスを与えるものは、どのような存在様相を持つのであろうか。一言で言えば、それが、計画（Plan）であり、計画性（Planmäßigkeit）なのだ。ユクスキュルは、次のように語る—「……機械の場合、オーガナイザー（Organisator）が製造管理者（Bauleiter）に、メカナイザー（Mechanisator）が操作管理者（Betriebsleiter）に対応するであろう。両者とも、計画に従って行動する。それに対して、生物において、我々は、行動する計画（handelnde Pläne）に関わらざるを得ない。これらの計画が、非物質的ファクターとして、どのように物質に作用するか、という有り方について、我々は何も知らない。我々が全く一般的に言えることは、それらの計画がインパルスを与え、インパルスがさらに物質に作用する、ということだけなのである。このような意味で、我々は、能動的な計画を計画的なインパルス系（ein planmäßiges Impulssystem）と定義することができる⁴⁰⁾」。そして、この計画的なインパルス系が、物質交代を行う生きた細胞の機能能力形態を管轄下に置くことで、細胞は自律体（Autonom）と呼ばれるのであり、また細胞自律体は、あらゆる高次な自律体に素材を引渡す。そして、このような高次な自律体が、機能環なのであり、それらの機能環から行動が組み立てられる訳である⁴¹⁾。

では、生物を支配管理している様々な計画の全体的且つ統一的な存在様態である計画性とは、どのような有り方を示すのであろうか。

Ⅱ. 計画性について

ユクスキュルの機能環の分析は、先述のように、後にサイバネティクス理論が明らかにした、フィードバック・システムを持つ自動機械の原理の先取りともいい得る面を、いわば生物機械論の一面を持っていた。しかし、同時に、と言うより本質的に、ユクスキュルは、そのような自動機械と生物との根源的な差異を強調し、その独自性を主張する。

まず、常識的な見解であるが、機械が、基本的に人間によって支配管理されており、その装備部品の損傷を自ら修理修復しえない物であり、その点で他律的（heteronom）である。それと相違して、たとえ外見上自動機械と変わらないように見える機能的に完成した生命体の機能環は、自分の損傷を自ら修理修復するものである、つまり、自律的（autonom）である。「機械というのは、それが人間という生物により作られたのであるかぎり、完全に物質であり、ただ単に因果性に従うのである。従って、それは、死んだものであり、その計画性の維持のためには生きた管理者を必要とする。」⁴²⁾と、ユクスキュルは語る。

そしてさらに、機械が持つことのない、生命体のその自律性（Autonomie）を決定的に証明するのは、生物の個体発生という事実である、とユクスキュルは言う。この胚発生に於ける事実を、彼は、ドリーシュのウニの初期胚の分割実験やシュペーマン（Spemann, H.）のイモリの初期胚の結紮実験等から実証確定された発生の後成説（Epigenese）に基づき考察している。「……胚の中にある見えない組織が存在するのだとすれば、胚を切断すれば、その組織も共に切断されるに違いない。しかし、半分にされた胚は、それがさらに成長したとき、半分の動物を与えるのではなく、半分の大きさの二つの完全な動物を与えたのである。（略）解剖学的組織は、それが空間的に広がっているので、解剖学的干渉（手術）によって破壊されるに違いない。それに対して、その本質からして非空間的な規則（Regel）は、手術メスによって分割されえないのである。（略）胚の形態の初期には組織は存在せず、しかしたぶん胚の中にはある〈規則〉が存在するのであろう、という確認により、生物の発生についての今日的な学説が始まる。（略）規則は、どのように胚の原形質に作用するのか、という問いに、我々は、原形質の超機械的な能力（übermaschinelle Fähigkeiten）の考察に際して、それは、原形質のインパルス系列を配列規定する、ということによって答えた。非空間的な規則と空間的に指示配列される原形質との間の仲介者として、我々は、インパルスを想定した。それについて手短かに述べよう。インパルスは、原形質に一つの過程を解発する。この解発を、我々は、酵素や触媒の作用との類比で思い浮かべることが出来る。（略）一方、我々は、インパルスに非物質的な性格（immaterieller Charakter）を帰するのである。この性格は、一方で、インパルスに、新たな因果系列を始める能力を与えるのであろう。また他方で、それは、計画的な規則（planmäßige Regel）の支配の下で、インパルスの効力を発生させるのである。」⁴³⁾と、ユクスキュルは語る。

さて、生物の個体発生に於ける自律性と機能的に完成した生物に於ける自律性とは、表現する規則を、ユクスキュルは、それぞれ発生規則（Entstehungsregel）と機能規則（Funktionsregel）と名付ける。⁴⁴⁾また、先の節の終わりで触れたが、発生規則を指導する能動的な計画をオーガナイザ

ー (Organisator) と名付け、また、機能規則を指導するその計画をメカナイザー (Mechanisator) と名付ける。彼は、かく言う—「計画は、日常的な意味では、何か非活動的で効力の無いものである。しかしながら、生物が支配されている諸計画は、その本質から言って、活動的で効力がある。このことは、シュペーマン (Spemann, H.) が出芽 (Sprossung) を支配する計画に用いたオーガナイザーと言う言葉で示される。機能的な構成計画 (Bauplan) と同じ意味である能動的な機能規則には、メカナイザーと言う言葉を、私は選んだ。⁴⁵⁾」。

そして、このオーガナイザーとメカナイザーとが、細胞の発生やその完成体の物質交代やまた全体的な生体の様々な機能環を維持管理する様々な計画に於いて、また同時にそれぞれの生物の種に独自の機能環のその個々の生物体の全体性に於ける行動を指導する構成計画に於いて、超機械的な様々のインパルスを介して物質に作用し、生物を計画的 (planmäßig) に動かす、わけである。さらに、ユクスキュルは、かくの如く語る—「我々は、生物の組織とそれらの他の生物の組織への多様な結合の考察に於いて、常に至る所でその究極的な細部にまで、ただただ完全なものを作り上げている自然力の支配管理 (摂理) (das Walten einer Naturkraft) を知りはじめたのである。この自然力を、我々は、計画性 (Planmäßigkeit) と名付ける。なぜなら、我々は、この自然力が多様な個々の事柄を、規則の助けにより、ひとつの全体なるものに結び付けるときにのみ、我々の統覚 (Apperzeption) により、それに応ずることが出来るからである。時間的にも分かれた個々の事柄を結び付ける高次の規則は、それが人間的な意図に基づくかどうかに関わりなく、普遍的に計画と表示される。我々は、計画性の代わりに、全く適切に機能性 (Funktionsmäßigkeit)、調和 (Harmonie) あるいは知恵 (Weisheit) と言うことも出来る。言葉は少しも重要なのではなく、規則に従い結び付ける自然力の実在を認めることが重要なのである。このような自然力を承認することなしには、生物学は、虚しい妄想で有りつづけるのだ。⁴⁶⁾」。

このようなユクスキュルの言葉が、まさに虚しい妄想だ、と言う方もいるであろうが、もう少しこの計画性について考えることにする。

さて、単細胞のものから複雑な多細胞のものまで、全ての生物の発生とその完成体の様々な機能環を導いている様々な計画と、それぞれの生物のゲシュタルトの全体 (ユクスキュルは、ゲシュタルトを有機的生命にだけ適応する。⁴⁷⁾) を支配している構成計画、そしてそれらの計画を全体的且つ一体的に包括している自然力に対して名付けられた計画性という概念は、何故にユクスキュルにとって必要でありまた必然的であったのであろうか。

第一に考えられる理由は、生物の環境世界の機能環の構造分析に於ける、一見して因果的機械論的・要素還元主義的に見える傾向を修正して、機能環が作用する場であるゲシュタルトの全体性とその秩序を獲得するためである。しかも、ユクスキュルは、環境世界の考察に、自然力である知恵 (Weisheit) に対して、人間の知識 (Wissen) が有するに過ぎない合目的性 (Zweckmäßigkeit) という概念を使用することを極力避けようとする。つまり、彼は、この擬人的という意味での合目的性という概念 (ベーア (Baer, K. E. von) が唱えた向目的性 (Zielstrebigkeit) も、生物と環境世界に関しては、不適切であると、彼は言う) を、動物の行動に適用してみると、いかに矛盾した結論が導き出されるかを、多くの観察と詳細な実験とから (もっとも、現代の動物行動学からみて、その事例の選択は、ユクスキュルの意図が入り込み過ぎているのだが) 数多くの例を提示した。⁴⁸⁾

ユクスキュルは、一般化して、次のように語る—「我々の第一の関心は、環境世界の考察に於いて、目的 (Ziel) という言葉のもつ幻の光を消そうということである。このことは、いろいろな動物の生活現象を、計画という視点のもとに整理することによってのみ可能なのである。恐らく後で、もっとも高等な哺乳動物のある種の行動を、目的をもった行動 (Zielhandlung) として説明しうるだろうが、それさえも全体的な自然計画 (der gesamte Naturplan) (つまり、計画性) に組み入れられているのである。⁴⁹⁾」。

これと関連して、本能 (Instinkt) という概念を排除するためにも、ユクスキュルは、計画性という概念装置が必要だったのである。つまり、「本能とは、個体を超越した自然の計画 (die überindividuellen Naturpläne) というものを否定しようとして、苦し紛れに用いざるを得ない代用に過ぎない。⁵⁰⁾」と、彼は語る。この考えは、一面では正当なものではある。つまり、世俗的に信じられていた (或いは、信じようとしていた) 個体の有する母性本能等の過ちを知らぬ全能なる本能という、曖昧で粗雑な、まさに擬人的な概念は、様々な動物の行動研究によって否定されたからである。

しかしながら、なるほど全能なる本能という架空の代物を拒絶することは結構なのではあるが、生物の各個体が有する、その個体が属する種の独特な、また同一種内でも各個体に特有な遺伝的で生得的なものをすべて排除して、全てを超個体的な計画性から (なるほど、それぞれの種に独自の計画性について述べてはいるが⁵¹⁾) 解釈することは、機能環の分析に於ける機械論的な傾向を自ら修正するあまりに陥った、彼の行き過ぎであったと、言えよう。

また、刺激—反応図式に陥ることを避けようとし、しかも、生物の、単に学習によるのではない、行動の自発性 (Spontaneität) をもたらす遺伝的で生得的なもの、所謂本能的なものの生理的装置 (生得的解発機構 (angeborener Auslösemechanismus)⁵²⁾) を考察することに気づかなかつた場合、また気づいていても、自然の有り様を賛美する余りに、それに眼差しを向けなかった場合には、生物の行動とその全体的な秩序を理解し解釈するためには、計画性と名付けられた形而上学的な自然力を導入せざるをえないのではなかろうか。

ユクスキュルは、斯く語る—「この複雑な世界の織物を担い形作る唯一の変わることなきファクターが、機能環である。全ての機能環は、同じ原理によって構成されている。それらの中に、私は、能動的な自然の計画を観るのであり、それらの計画は、宇宙 (Universum) の基本的なファクターとして有効に妥当しているにちがいない。響き渡る様々な環境世界から成り立っている、この全体的宇宙は、様々な機能環によって纏め上げられているのであり、そしてひとつの全体的計画に従って、我々が自然と名付けるひとつの一体性に結び付けられているのである。⁵³⁾」また「しかもなお、これら様々な環境世界はすべて、あらゆる環境世界にとって永遠に閉ざされたひとつのものによって、育てられ、担われている。それによって生み出されるすべての世界の背後には、永遠に認識されることなく、主体たる自然が、隠されているのだ。⁵⁴⁾」。

このようなユクスキュルの発言から、我々は、彼の計画性という概念について、いかなる理解を持ちうるであろうか。

ある人は、分子生物学の最近の成果により、もはや不毛なものとなりつつある生氣論 (Vitalismus) のみならず、人間が自分の中枢神経系の合目的な働きについて抱く意識を無機的な自然の中に投影することによる、人類が太古より有する物活論 (Animismus) にも基礎付けられ

た、疑似自然科学的な神秘主義であり、文学的作品以外の何物でもない、と切り捨てるかも知れない。そこまで強く言わずとも、「そこでフォン・ユクスキュルにならって「有機体の中には機械を操作する技師が一人いるに違いない」という手取り早い言い方をするのが、同じく不満足とはいえ、少なくとも正直な言い方だということになる。もちろんそれによってわれわれは十七世紀の神学や有神論の出発点にまで逆行してしまうことになる。つまり、創造の奇跡が宇宙開闢の(kosmogonisch) 神話の中だけでなく、現在只今の生物学の中にも働いていて、自然科学的な説明では説明のつかぬと思われるものを司っているに違いない、ということになってしまう。⁵⁵⁾」と言うヴィクトール・フォン・ヴァイツゼッカー(Weizsäcker, V. von)の批判に頷く人は多いであろうし、確かに重要な指摘である。

また、ユクスキュルのカントへの傾倒を考えて、思惟可能だが認識不可能な自然を、カントの本体(Noumenon)に、そして自然力である計画性を、カントの認識の形式(時間・空間とカテゴリ-)に対応させることも、厳密性に欠けるが、可能かも知れない。

無論、計画性の概念を積極的に解釈して、現代の混迷した思想状況の中で、新たなコスモスの多元論的思想世界を築くための形而上学的なシステム理論の形を取る自然哲学を創り上げる始動力を持つ概念である、と考えることもできる。丁度、近代初期17から18世紀の哲学者ライブニッツ(Leibniz, G. W.)の『モノドロギー(Monadologie)』が、人類生存の可能性の問題を含み、近代の乗り越えが問われている現代に、見直されるのと同じように。このことは、次節で少し触れることになる。

しかし、取り合えずここでは、この節の纏めとして、トゥーレ・フォン・ユクスキュル(Uexküll, Th. von)の次のような中立的な見解を挙げておくことにする—「環境世界論にとって計画性とは、物理学的自然科学にとっての因果性(Kausalität)と、だいたい同じような意味である。因果性もまた、普遍的原理としてのみ前提されるのであって、それによって特殊な因果関係の内容とか構造について予め何かが決定されているということはない。しかし、我々は、〈因果性〉という概念の普遍的な、内容的にはいまだ確定されていない意味を、物理学的自然科学と同じように、公正に(neutral)利用することに慣れてきたとはいえ、一方〈計画性〉という概念に関しては全く別な状態にある。というのは、それは、哲学的そして神学的な伝統に前もって負担を掛けられているからである。従って、環境世界論は、〈計画性〉という言葉で、全てのことを理解している訳ではないことを、明確に指摘することが、必要である。⁵⁶⁾」。

Ⅲ. その生けるものと死せるもの

ユクスキュルの環境世界論に於ける生けるものと死せるものを、現代の思想状況で考えてみる時、その論説の中の時代に限定された実証的事柄を除けば、全く死に絶えたものは無いと言ってよい。つまり、例えばその生氣論や因果論的進化論への批判そして静態宇宙論でさえも死に絶えてはいない。しかし、またその思想の現代科学に直接繋がるような部分、即ち例えば機能環の構造分析や生物世界の能動的で有機的なシステムの把握でさえ、そのままでは、現代の思想状況で、実用的という意味でなくとも、有効性を持ちえない。

では、1990年代というまさにこの現代に限らず、広く20世紀という現代において、ユクスキュルの思想、即ち環境世界論における生けるもの、つまり新たな思想活動を呼び起こした、あるいは呼び起こし得る要素とは、何であろうか。

その呼び起こした広い意味での影響については、「はじめに」で少し触れたが、その中から一例として、ハイデッガーの『存在と時間』の第一部、第一編、第三章「世界の世界性」の「A環境世界性と世界性一般の分析（Die Analyse der Umweltlichkeit und Weltlichkeit überhaupt）」という箇所と、同部同編第二章の第十二節にみられる「今日では、〈人間はそれぞれ環境世界を持つ（der Mensch hat seine Umwelt）〉ということがしきりに言われているが、この言い方も、この〈もつ〉ということが規定されずにいるかぎり、存在論的には意味がない。（略）〈環境世界を持つ（Haben einer Umwelt）〉ということは、存在的には当たり前の話であるが、存在論的には問題なのである。（略）この存在構成は、とりわけK. E. フォン・ベア以来、生物学で再び用いられるようになったが、それをわれわれが哲学的に使用するからといって、それを〈生物学主義〉だと推論してはならない。⁵⁷⁾」と言う語りを挙げておく。詳しくは、私の以前の論文⁵⁸⁾を参考にしてほしい。

それでは、ユクスキュルの思想が直接的に呼び起こした思想活動の一つとは、彼の本来の研究分野である生物学・動物学に於ける新たな分野、つまりポルトマン（Portmann, A.）が「かれは私たちにつぎのことを教えてくれた。すなわち、多数の動物型のおのおのは、それぞれの感覚生活と脳構造の特性にもとづき、豊富な外界からの印象をいろいろ選択して受容し、そして動物群ごとに異なる体験によって、われわれ人間に最初は隠されているが批判的研究によっていくらか近づく道が開かれるようになる未知の〈環境世界〉を構成するということである。こうした考察をもとにして、それにつづく10年のあいだに、動物の行動の分析を目的とする生物学の新分野が発展した。⁵⁹⁾」と述べるような分野、即ち行動学・生態学（Verhaltensforschung, Ethologie）とか比較行動学（vergleichende Verhaltensforschung）と言われる研究分野である。具体的な人物名で言うと、ニコラス・ティンバーゲン（Nikolas Tinbergen）、カール・フォン・フリッシュ（Karl von Frisch）、コンラート・ローレンツ（Konrad Lorenz）、オスカー・ハインロート（Oskar Heinroth）等が築き上げた分野である。

しかし、この思想活動について論ずることは、本論の傾向からやや離れることになるので別の機会に譲ることにする。

では、ユクスキュルの思想が呼び起こしたいま一つの思想活動とは、何であるのか。それは、彼の本来の研究分野から離れた、だがその研究活動の根底にあり、その活動が生じ支えられそして帰りに行く前述定的性起の場に通じる形而上学的自然哲学に対する共感と反発の両義的な思いの渦の内より湧き出た思想活動である、即ち人間の単なる哲学的自己省察ではない哲学的人類学（Philosophische Anthropologie）である。勿論、哲学的人類学は、近代の広範な思想活動（自然科学であれ精神科学であれ、その他であれ）を、また「はじめに」で触れたような第1次世界大戦後のヨーロッパの社会状況を背景にして生まれた学的動向であるが、その成立を表す著作の主要動機には、ユクスキュルの環境世界論の影が濃厚である。

つまり、その影響は、先の挙げたように、二義的で、その共感的な動きは、故生松敬三が次のように巧みに纏めているが「まさしくそれまで世界の中心を占めているかに思いなされていた人

間の、生物としての特権的地位を剥奪して、それぞれの種に独自の時間・空間の世界があるのだという事実をつきつけることによって、人間存在への反省を強いた点に⁶⁰⁾ある。一方、反発的な動きとは、先の引用にある「それぞれの種に独自の時間・空間の世界」、即ち環境世界をユクスキュルが人間の世界にも、その理論の首尾一貫性また自然への信仰的思いから、他の生物と同様にそのまま適用したことに対する、人類学的視点からの反発である。この動向は、人間の特殊性を新たに全体的に問いなおす現代の哲学的人類学的重要な観点であるが、以前に論じたことがあるため、⁶¹⁾ここでは簡潔に触れるに留める。

さて、ユクスキュルも環境世界とは違う人間独自の世界を考えてはいる。つまり、「大抵の人間は、彼らが、おおくの点で矛盾する二つの世界の中で生きていることを、まったく気付いていない。⁶²⁾」と述べ、その二つの世界を、「私を取り巻くすべての客観的な実在⁶³⁾」としての世界（Welt）と、また「私を取り巻くすべての主観的な実在⁶⁴⁾」としての環境世界（Umwelt）と表現する。だが、ユクスキュルは、人間がこの二つの世界に生きており、また生きうるという事実性と可能性を、人間の特殊性を解明するための有意義な基盤とすることはない。つまり、彼にとって世界（Welt）とは、「測定可能であり数字によって描出再現されうる純粋に量的なもの⁶⁵⁾」であり、「環境世界の希釈された注出物⁶⁶⁾」なのである。要するに、ユクスキュルにとっては、生理心理的な生であれ技術芸術的生であれ、人間の主体的な生の遊動域である環境世界が第一次的であり、客観的世界は、環境世界の部分的な修正に役立つに過ぎない二次的なものなのである。従って、ユクスキュルには、例えば客観的で抽象的なカシの木よりも、具体的な個人の生の領域内でのカシの木の意味が、即ち猟師の、木材商人の、また夢見がちの少女の環境世界事物（Umwelt Ding）としてのカシの木が重要なのである。⁶⁷⁾つまる所、具体的な人間は、第一義的に環境世界束縛性（Umweltbindung⁶⁸⁾）という存在様態に有ることを、ユクスキュルは確認し、また主張するのだ。いづれにせよ、「人間の経験と知識の世界は生物の無数の環境世界の中の一つであって、ウニやハエやイヌのそれとくらべても別に独特のものではない。電子や原子から銀河にいたる物理学の世界でさえも人間の産物にすぎず、それはヒトという種の心理物理的オーガニゼーション（the psychophysical organization of the human species）に依存している⁶⁹⁾」と、彼は言う。ユクスキュルは、種に独自の生得的行動様式としての束縛性と個としての生物主体の生生活動における相対的な束縛性とを、動物においては当然のこと、人間においても無差別化して論を展開したのである。

このような、ユクスキュルの環境世界論における人間の環境世界束縛性に対して、人間は「環境世界から自由（umweltfrei）」であることを、崇高だが限定された意味で主張し、「世界開放的（weltoffen⁷⁰⁾）」という言葉⁷⁰⁾を術語付けたのが、現代の哲学的人類学の形成者の一人であるマックス・シェラー（Max Scheler）である、つまり、「〈精神的（geistig）〉存在は、もはや衝動にも環境世界にも束縛されてなく、〈環境世界から自由〉である、それで、こう名付けたいのだが、〈世界開放的〉である⁷¹⁾」と。この人間の「世界開放性（Weltoffenheit）」の概念を批判的に継承し、それを生に禁欲的な精神にのみ限定せず、心身という全体的人間の存在様相の特異性を表す概念としたのが、先に引用したシェラーの著の同年（1928年）に出した著作で「脱中心性（Exzentrität）」という術語を用いたが、ヘルムート・プレスナー（Helmuth Plessner）である。著作は前二者に遅れたが、この概念をほぼ確定的に表現したのが、アルノルド・ゲーレン（Arnold Gehlen⁷³⁾）である。これ以上は、先に触れたように、割愛する。

それでは、ユクスキュルの思想で今現在新たな思想活動を呼び起こす可能性を持つ部分とは、何であろうか。それは、無批判で安易に取り扱えば無責任な信仰的独断となる恐れがあるが、彼の形而上学的な自然哲学であろう。つまり、前節で触れたように、新たなコスモスの多元論的思想世界を築く基盤となる自然哲学である。その哲学を形成する要因の一つは、ユクスキュルの環境世界相互の相対的視点、即ち価値論的な同等性の視点であり、遠近法主義（*Perspektivismus*）と呼ばれうる立場である。それは、ベルタランフィ（*Bertalanffy, L. von*）の言葉を借りれば、「第一に、私たちの経験と思考の諸カテゴリーは文化的要因とともに生物的要因によっても決定されているように思われる。第二に、この人間の束縛は、私たちの世界像が漸進的に脱擬人化されるにつれてとり払われてゆく。第三に、たとえ脱擬人化されたとしても、知識は實在の一定の側面あるには相を映し出すものにすぎない。けれども第四に、再びクサ（*Nicolaus Cusanus*）の表現を用いれば、「全体はすべての部分により輝く」（*ex omnibus partibus relucet totum*）、つまり、それぞれの側面は、相対的なものにすぎないけれども、真なるものをもっている。⁷⁴⁾」という立場である。いま一つの要因は、「自然力」とか「調和」とも言われるユクスキュルの「計画性」という概念である。つまり、マイクロコスモスたる環境世界とマクロコスモスたる自然の、視点交換による一体二重性の反映的機能連関そのものを示唆する概念である。この場合、マイクロコスモスたる環境世界は、閉鎖的ではなく、言わば「無窓であるどころかモノドそのものが全面的に窓である⁷⁵⁾」状態にあり、表現し（*représenter*）表出する（*exprimer*）本質的な連関に於いて調和している。これらの要因を、既に言葉使いからお分かりのように、ライプニッツの『モノドロギー』の中から例えてみると、「57 同じ町でも異なった方向から眺めれば、全く別なもののように見え、言わば眺望として（*perspectivement, auf perpektivische Weise*）多重化されるようになるが、それと同様に、無限に多数の単一なる実体によって、その数だけ異なった宇宙があることになる。しかしそれは、それぞれのモノドによる様々に異なる視点からの唯一なるもの〔宇宙〕の眺望（*les perspectives d'un seul, die Perspektiven des einen einzigen*）にすぎない。⁷⁶⁾」となろう。

「〈環境世界・環境（*Umwelt*）〉とは、私たち人間の経済が生んだいろいろの結果から、また私たちの無理解から、全力をあげて守らなければならない自然の生活空間（*Lebensraum*）のための標語になった⁷⁷⁾」現在は、言わば「宇宙の永遠なる生きた鏡（*un miroir vivant perpetuel de l'univers, ein dauernder lebendiger Spiegel des Universums*）⁷⁸⁾」としての環境世界の意味が忘れ去られた時代であり、ハイデッガーが「故郷喪失（*Heimatlosigkeit*）⁷⁹⁾」と呼んだ時代である。この時代に思索する私たちは、ユクスキュルの思想をその根本に於いて継承したポルトマンの次のような言葉、「自然は、合理的科学とは無縁で詩や造形芸術によって私たちに最高の価値を贈ってくれる生活形態により、私たちの世界像を豊かにする、そうした精神の有り方があることを、承知している⁸⁰⁾」という言葉を噛みしめ、哲学の解体と再構築を進めていくという困難な事態に直面して、既に久しいのである。

引用文献

- Uexküll, J. von : *Theoretische Biologie*. Berlin 1920, Frankfurt a. M. 1973. (Abk. Th. B.) : *Beutungslehre*. Bios, Bd. x. Leipzig 1940.
- u. Kriszat, G. : *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen*. Berlin 1934.

- 上記の二著作は、A. Portmannと Th. von Uexküllが解説を加えた Fischer 社版（Frankfurt a. M. 1970）を使用、頁数もそれによる。（Abk. Streifzüge）『生物から見た世界』（日高敏隆、野田保之訳、思索社）参照
- Bertalanffy, L. von : General System Theory. Penguin University Books 1973. (Abk. G. S. T.) 『一般システム理論』（長野敬、太田邦昌訳、みすず書房）参照 : Das biologische Weltbild I - Die Stellung des lebens in Natur und Wissenschaft-. Bern 1949. (Abk. Weltbild) 『生命—有機体論の考察—』（長野敬、飯島衛訳、みすず書房）
- Cassirer, E. : An Essay on Man. Yale University Press 1944, 1973. (Abk. on Man) 『人間』（宮城音弥訳、岩波書店）参照
- Heidegger, M. : Sein und Zeit. Tübingen 1967. (Abk. S. u. Z.) : Über den Humanismus. Frankfurt a. M. 1949, 1968. (Abk. Humanismus)
- Husserl, E. : Welt und Wir. Menschliche und tierische Umwelt (1934), In : Husserliana Bd. xv, Haag 1973. (Abk. Welt u. Wir)
- Leibniz, G. W. : Monadologie. In : G. W. Leibniz Philosophische Schriften Bd. I, Darmstadt 1985. (Abk. Monado) 『『モナドロジー』を読む ライプニッツの個と宇宙』（池田義昭著・訳、世界思想社）参照
- Portmann, A. : An den Grenzen des Wissens -Vom Beitrag der Biologie zu einem neuen Weltbild-. Wien u. Düsseldorf 1974. (Abk. An den Grenzen) 『生物学から人間学へ ポルトマンの思索と回想』（八杉龍一訳、思索社）参照
- Scheler, M.: Die Stellung des Menschen im Kosmos. Bern 1975. (Abk. im Kosmos)
- Weizsacker, V. von : Der Gestaltkreis. suhrkamp t. w. 18, 1973. (Abk. Gestalt) 『ゲシュタルトクライス』（木村敏、浜中淑彦訳、みすず書房）参照
- 加藤尚武『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー（Abk. 環境）
- 生松敬三『人間への問いと現代 ナチズム前夜の思想史』NHK ブックス230（Abk. 問い）
- 下村寅太郎『スピノザとライプニッツ』中公バックス世界の名著30所収（Abk. ライプニッツ）

注

- 1) 環境171頁
- 2) 問い8頁
- 3) Th. B. s. 9
- 4) ibid.
- 5) ibid.
- 6) on Man p. 23.
- 7) ibid.
- 8) Th. B. s. 10.
- 9) 「生物にこの世界のなかで勝手がわかるようにしてくれる感覚器官や神経の機構は、世界をわれわれにとって現象的な空間として具象的に体験させてくれる現実的事実との対決、および適応によって系統発生的に生じたものである。」というコンラート・ローレンツの考えに通じるものがある。cf. Lorenz, K. : Die Rückseite des Spiegels. München 1973. s. 20. 『鏡の背面』（谷口茂訳、思索社）参照
- 10) Welt u. Wir s. 174.
- 11) 例えば、M. メルロ＝ポンティ著、滝浦静雄・木田元訳『言語と自然』みすず書房。96～99参考のこと。
- 12) on Man p. 23.
- 13) Th. B. s. xix.
- 14) Th. B. s. 324.

- 15) *ibid.*
- 16) *ibid.*
- 17) Th. B. s. 157.
- 18) Th. B. s. 104.
- 19) Th. B. s. 324.
- 20) これは、一応 K. ローレンツによって「生得的解発機構(angeborener Auslösemechanismus)」と呼ばれるものに似たものだと言うことも可能だが、ユクスキュルでは結局のところ形而上的概念と結びつく。
- 21) Th. B. s. 150.
- 22) *ibid.*
- 23) *ibid.*
- 24) Th. B. s. 151.
- 25) Streifzüge s. 10.
- 26) Th. B. s. 158.
- 27) Th. B. s. 151~152.
- 28) Th. B. s. 153.
- 29) Streifzüge s. 11.
- 30) Streifzüge s. 165.
- 31) *ibid.*
- 32) G. S. T. p. 4.
- 33) Weltbild 訳21頁
- 34) Th. B. s. 302~308.
- 35) Th. B. s. 307.
- 36) Th. B. s. 308.
- 37) Streifzüge s. xxxvi.
- 38) Th. B. s. 311.
- 39) Th. B. s. 302.
- 40) Th. B. s. 301.
- 41) Th. B. s. 301~302.
- 42) Th. B. s. 294.
- 43) Th. B. s. 219~220.
- 44) cf. Th. B. s. 214. u. s. 218.
- 45) Th. B. s. 301. Organisator は、ふつう形成体と訳されているが、敢えてこのようにしておく。
- 46) Th. B. s. 214.
- 47) cf. Th. B. s. 293.
- 48) cf. Streifzüge s. 53~55. 述べられている母鳥の行動分析をみよ。もっとも、これは G. H. Brückner によるニワトリの社会関係の研究に寄るのだが。
- 49) Streifzüge s. 50.
- 50) Streifzüge s. 56.
- 51) cf. Th. B. s. 154. s. 291.
- 52) 注(9)と(20)参照のこと。
- 53) Th. B. s. 324.
- 54) Streifzüge s. 103.
- 55) Gestalt s. 51.
- 56) Streifzüge s. xLvi.

- 57) S. u. Z. s. 57~58.
- 58) 「ハイデッガーに於ける一種の環境世界論」『千里山文学論集』第13号所収
- 59) An den Grenzen s. 19.
- 60) 問い93頁
- 61) 「人間の世界開放性とは、いかなる意味か」大阪電気通信大学研究論集『人文・社会科学編』第24号所収
- 62) Th. B. s. 334.
- 63) ibid.
- 64) ibid.
- 65) Th. B. s. 336.
- 66) Th. B. s. 338.
- 67) cf. Th. B. s. 340.
- 68) cf. An den Grenzen s. 102.
- 69) G. S. T. p. 252.
- 70) 世界開放的という概念は、18世紀後半のヘルダー（Herder, J. G.）の『言語起源論』に既にみられるが。
- 71) im Kosmos s. 38.
- 72) Die Stufen des Organischen und der Mensch. Einleitung in die philosophische Anthropologie.
- 73) Der Mensch. Seine Natur und sein Stellung in der Welt. Berlin 1940.
- 74) G. S. T. p. 261.
- 75) ライブニッツ73頁
- 76) Monado s. 465.
- 77) An den Grenzen s. 235.
- 78) Monado s. 465.
- 79) cf. Humanismus s. 25.
- 80) An den Grenzen s. 237.